続・西ヨーロッパの旅から

荒牧富美江

夏休みの西欧の旅も三回になった。ことしは異常気象のせいか、八月の末というのにパリは夏、アムステルダムとロンドンはもう冬であった。とくにロンドンは、観光客の姿もめっきり少なくなり、街は落着いた生活を取り戻したように見えた。夜になると、いわゆる「ホームレス・ピープル」が、かき集めたダンボールを敷いて地下道にゴロゴロと横たわっている。若い女性もいる。気温は十二、三度。暖かい飲物を振舞っているらしいボランティアの車に人垣ができている。長く厳しいヨーロッパの冬が想像される光景である。

さて、ことし第一の目的はオランダの放送制度について、ヒルバサムにあるオランダ放送連盟（NOS）を訪ねる予定だったが、連絡の手違いで見学できなくなってしまった。

現在、オランダのテレビは三系統。「それぞれ異なった政治的、宗教的信条を主張することを建て前とした」放送団体八つが、支持する会員の数に応じて政府から放送時間の割当を受け、交互に放送する独得な制度といわれる。そのなかでNOSは、NOS自身の番組制作の他に、各放送団体が制作した番組の調整、スタジオの設置・維持・管理などを行う中心的な組織である。今回、運営の実際について取材できなかったのは心残りであった。

かわりに取材できたのは、ロッテルダム市のCATVである。ロッテルダムは第二次大戦でドイツ軍の空襲によって壊滅した港町で、破壊を免れた古い市庁舎と、町のなか随所にみられる斬新な建物とが融和したエネルギッシュな街である。既に普及しているCATVは諸外国の番組の再送信など、アムステルダムとほとんど変らないが、アメリカCNNの再送信と、来年一月から新しいローカル・チャンネルをもう一系統増やして二〇チャンネルにする準備が進められていた。新しいチャンネルは三年間の予定で市がサポートする計画だという。番組表作りに取組む、市のエネルギー局主幹HIPPES氏は、オランダの放送制度について「最近は主義・主張を持たない若者が増えているし、商業放送の問題など多々ある。CATVの普及によって各国の放送が数多くネットされている現在、制度改革の時期がきているのではないか」といっていた。

さて、ことしもイギリス滞在は九日間で六つの劇場に通う。ロンドンでは、ミュージカル二つと、ナショナル・シアター（NT）のセリフ劇を三つ。そのあと九月五日から、ロンドンで「世界の航空ショー」が開かれるというので、それを避けて、シェイクスピア劇はストラトフォードで観ることにした。

ミュージカル上演の一四劇場のうち七劇場はそっくりそのまま三年ごし続演中である。「オペラ座の怪人」を上演しているハー・マジェスティズ劇場は、行列こそみかけなかったが切符は三月まで売切れだという。日本でもなかなか観られないというからこれはちょっと残念だ。

最初に観たのはプリンス・オブ・ウェールズ劇場の「南太平洋」。いうまでもなくロジャースとハマー・ステインの懐かしの名作である。日本でも終戦直後に、進駐軍専用のアーニー・パイル劇場（現東京宝塚劇場）で上演されていたし、ジョシュア・ローガン監督の映画も封切られた。新宿コマ劇場で、森繁久弥・越路吹雪で上演されたのを観た記憶もある。「バリ・ハイ」などのヒット曲がそのころを憶い出させ、アメリカ兵たちの迫力あるコーラスが楽しかった。

もう一つのミュージカル、シャフツベリー劇場の「フォーリーズ」は、「キャッツ」や「レ・ミゼラブル」「オペラ座の怪人」を成功させているキャメロン・マッキントッシュのプロデュース作品で、昨年からのロング・ランである。「一九七一年にブロードウェイで上演した時は、批評家には称賛されたが観客の入りはよくなかった。今回は手を入れて十五年ぶりの上演」だと解説にある。

かつてのレヴュー・スター達が集う再会の席で、過ぎ去った栄光の日々が回想の形で語られる。彼らの若き日の野心、変愛の葛藤を若い役者たちが演じる。昔の役者と若い役者たちが、現在と過去を交錯した形で進めてゆくアイディアはなかなか面白かった。最後は古いスターたちの歌と踊りのヒット・アルバムで締めくくっている。

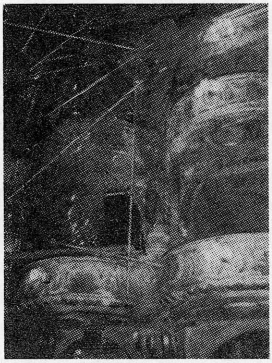
劇場は、一九一一年にオープンした、もとプリンス劇場といわれたもので、老朽化したにも拘らず、市民達の運動によって、劇場建築上の重要な建物として保存され、何回か補強修理が行われてきたという。「上演中」の今も劇場の表には鉄パイプの足場が組まれている。オヤオヤ大丈夫かなと思いながら中に入ると、舞台の両袖にも天井までパイプが組まれ、ホコリで真白になったビニールがヒラヒラなびいている（写真参照）。幕が上れば舞台のセットもパイプの足場、うらぶれた感じが漂う。どうやら劇場が修理中なだけではないらしい。とすれば、なかなか凝った趣向だ。古めかしいこの劇場を選んだのも、そうした雰囲気を狙ったのかどうか……。しかし、本当のところはわからない。

今回観た六つの劇場のうちカーテンが下りるのはミュージカルのこの二つだけで、他のセリフ劇は、どれもいわゆるオープン・ステージである。NTのリットルトン劇場の「灼けたトタン屋根の上の猫」も、客席に入るとすでに写実的な装置が見えている。脚本はテネシー・ウィリアムズの最初の版によっているが、芝居全体に、舞台となったアメリカ南部の色合いが乏しく、酒びたりの主人公ブリック青年が、フットボールの英雄という虚名に苦しみ、挫折する悲しみの影が稀薄なのも少々物足りない。下準備のために原作を読み、ポール・ニューマンとエリザベス・テーラーの映画（リチャード・ブルックス監督）のビデオを前もって見ておいたので、つい比較してしまう。英国の役者たちにそれを望むのは無理なのだろうか。

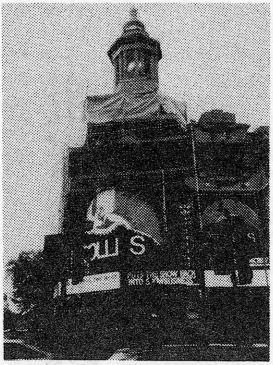
ロンドンで観る古典劇は二つ、同じリットルトン劇場の「チェインジリング（THE CHANGELING）」は、ミドルトンとローリーの合作で、一六二二年の作品というから、シェイクスピアにつづくベン・ジョンソン、フレッチャーの時代である。チラシには〝流血の悲劇〟とうたい、愛人と結婚するために許婚者殺しを企てるヒロインは、依頼した殺害者から肉体を求められ、ついに二人とも流血の中に倒れるという暗い芝居だった。セリフの詳細はよくわからなかったが、役者たちの鍛えられた朗誦が力強く、古典劇の余韻が楽しかった。

もう一つの「シャフラーン（THE SHAUGHRAUN）」は一八七四年の作品で、

前者よりも新しい、準古典劇というところ。作者ブーシーコー(Dion Boucicault)はアイルランド出身の劇作家である。古典劇のこの二つの作品は、下準備の資料もなく少々気が重かったが、九月三日土曜日、テムズ川畔のオリヴィエ劇場には中学生くらいの子ども達が大勢群れていた。あの子たちにわかるなら……と、いささか安心したが、芝居はアイルランドの反乱を背景に展開する冒険大活劇である。



(内部)



(正面)

シャフツベリー劇場

大劇場の舞台機構をフルにつかって跳びはねたり飛び降りたり、恐ろしいほどスピーディに舞台が回転して息もつかせぬ大追跡、三時間余を、あれよあれよと飽きるところがなかった。新聞評に「近ごろ愉快な観もの」とあったが、まさにその通りだった。客席との一体感、達者な役者たちが一糸乱れず奮闘する緊張感には改めて感心した。たまたまこの日は九月最初の土曜日、テムズ川に過ぎ行く夏を送る日だったようだ。ポスター一枚なく、旅行者にはわからなかったが、幕間にひびく大きな音に何事かと出てみると、暮れなずむ空にたてつづけに美しい火花がはじけていた。日本の花火のように余韻嫋々という風情はなかったが、幾何模様のように正確に、さらっとしかし見事に華やかであった。バルコニーには、千百余の客席を埋めていた観客が総出で、グラス片手に感嘆の声をあげていた。

明ければ快晴の日曜日、スラトフォード・アポン・エイヴォンに移る。気温も二〇度まで上り、シェイクスピアゆかりの美しい町は、休日の散歩を楽しむ人で溢れていた。ロイヤル・シェイクスピア劇場の下を、ゆったりと流れるエイヴオン川から分れた運河の細い水路を、川巾いっぱいの小舟が、水門を開けたり閉じたりしながらのんびりと登ってゆく。中世さながらの優雅な風景である。

RSCの「空騒ぎ」は現代服のシェイクスピア劇である。領主ドン・ペドロが戦いに勝利を得て、ヘリコプターで帰還するところから始まる幕開きにはちょっと驚かされたが、あとはそれほど新しい演出でもない。「女主人公のベアトリスが、サッチャー首相みたいでかわいげがない」とかいう新聞評に共感。対照的にヒーロー役の女優の可憐さが印象に残る。現代風の演出といっても、衣装とヘリコプターの音だけでは何となく物足りない。

三年続けた西欧の旅もこれでひとまず終ろうと思う。清潔で小じんまりとしたホテルも、世話になったオランダ語の通訳も、行動範囲もほとんど変えない、頑固で気ままな旅だった。とくに今回は、あまり欲ばらず、落穂拾いのような呑気さで劇場をまわった。折々にふと見せてくれた街の素顔も忘れがたく、今も心に残る。

(一九八八・一二・二〇)

(訂正=前号のオールド・ヴィック劇場は国立劇場劇団が本拠とした劇場でした。)